

中島
敦

木
乃
伊



木^み

乃^い

伊^ら

大キュロスとカツサンダネとの息子、波斯王カンビュ
セスが埃及えじぶとに侵入しんにゆうした時のこと、その麾下きかの武将にパ
リスカスなる者があつた。父祖は、ずっと東方のバクト
リヤ辺から来たものらしく、いつまでたつても都の風ふうに
なじまぬすこぶる陰鬱いんうつな田舎者いなかものである。どこか夢想的な
所があり、そのため、相当な位置にいたにもかかわらず、
いつも人々の嘲笑ちようしやうを買っていた。

波斯軍がアラビヤを過ぎ、いよいよ埃及の地に入った

頃ころから、このパリスカスの様子の異常さが朋輩ほうばいや部下の注意を惹ひきはじめた。パリスカスは見慣れぬ周囲の風物を特別不思議そうな眼付めつきで眺ながめては、何か落著おちつかぬ不安げな表情で考え込こんでいる。何か思出そうとしながら、どうしても思出せないらしく、いらいらしている様子がはつきり見える。埃及軍の捕虜ほりよ共が陣中じんちゆうに引張られて来た時、その中のある者の話している言葉が彼の耳に入いった。しばらく妙みような顔をして、それに聞入っていた後、彼は、何だか彼等らの言葉の意味が分わかるような気がすると、傍の者に言った。自分でその言葉を話すことは出来

ないが、彼等の話す言葉だけは、どうやら理解できるよ
うだ、というのである。パリスカスは部下をやつて、そ
の捕虜が埃及人か、どうか（というのは、埃及軍の大部
分は希臘ギリシャ人その他の傭兵ようへいだったから）を尋ねたずさせた。
たしかに埃及人だという返辞である。彼はまた不安な表
情をして考えに沈しずんだ。彼は今までに一度も埃及に足を
踏ふみ入れたこともなく、埃及人と交際をもったこともなか
ったのである。激はげしい戦の最中もなかにあつても、彼は、なお、
ぼんやりと考えこんでいた。

敗れた埃及軍を追うて、
古いにしえの白壁しろかべの都メムフェイスに

入城した時、パリスカスの沈鬱ちんうつな興奮は更に著さしくなつた。癩癩病者てんかんの発作ほつさ直前の様子を思わせることもしばしばである。以前は嗤わらっていた朋輩達たちも少々気味が悪くなつて来た。メムフィスの市まちはずれに建っている方尖塔オベリスクの前で、彼はその表に彫ほられた絵画風な文字を低い声で読んだ。そして、同僚達どうりょうに、その碑ひを建てた王の名と、その功業とを、やはり、低い声で説明した。同僚の諸將は、皆みな、へんな気持になつて顔を見合せた。パリスカス自身もすこぶるへんな顔をしていた。誰だれも（パリスカス自身も）、今までパリスカスが埃及の歴史に通じている

とも、埃及文字が読めるとも、聞いたことがなかったのである。

その頃から、パリスカスの主人、カンビユセス王も次第にきようぼう狂暴なふうてん瘋癲の氣に犯され始めたようである。彼は埃及王プサメニトスに牛の血を飲ませて、これを殺した。それだけではあき慊焉たらず、今度は、半年前にほう崩じた先王アメシスのしかばね屍をはずか辱しめようと考えた。カンビユセスが含む所のあったのは、むしろアメシス王の方だったからである。彼は自ら一軍を率いて、アメシス王のびようしよ廟所のあるサイスの市まちに向った。サイスに着くと、彼は、故

アメシス王の墓所を探出し、その屍を掘出ほりだして、己おのれの前まへに持って来るよう、一同に命令した。

かねてかかる事のあるべきを期たくしていたものとみえ、アメシス王の墓所の所在は巧たくみに晦くらまされていた。波斯軍の将士はサイス市内外の多数の墓地を一つ一つ発あばいて検あらためて歩かねばならなかつた。

さて、パリスカスも、この墓所搜索隊そうさくたいの中に加わっていた。他の連中は、埃及貴族の木乃伊と共に墓に納められた無数の宝石、装身具そうしんぐ、調度類りやくだつの掠奪りやくだつに夢中になつていたが、パリスカスだけは、そんなものには目もくれ

ず、相変らず沈鬱な面持で、墓から墓へと歩き廻まわっていた。時々その暗い表情のどこかに、曇天どんてんの薄れ陽うすびのような明るみが射さしかけることもあるが、それはすぐに消えて、また、元の落著おちつきのない暗もどさに戻もどってしまふ。心の中に、何か、ある、解けそうひっかかで解けないものが引掛ひっかかっているような風である。

搜索を始めてから何日目かのある午後、パリスカスは、たった一人で、ある非常に古そうな地下の墓室の中に立っていた。いつ、同僚や部下と、はぐれてしまったものか、この墓は市まちのどの方角に当るものか、それらは、ま

るで判ら^{わか}ない。とにかく、いつもの夢想から醒^さめて、ひよいと気が付いてみたら、たった一人で古い墓室の薄暗がりの中にいた、というより外^{ほか}はない。

眼が暗さに慣れるにつれ、中に散乱した彫^{ちようぞう}像、器具の類や、周囲の浮彫^{うきぼり}、壁画^{へきが}などが、ぼうつと眼前^{うきあが}に浮上^{うきあが}って来た。棺^{かん}は蓋^{ふた}を取られたまま投出され、埴輪^{ウシヤブチ}人形の首が二つ三つ、傍^{かた}にころがっている。既^{すで}に他の波斯兵の掠奪^{りやくだつ}にあつた後であることは、一見して明らかである。古い埃^{ほこり}のにおいが冷たく鼻^{おそ}を襲^{おそ}う。闇^{やみ}の奥^{おく}から、大きな鷹頭^{たかづち}神の立像^{たてざう}が、硬^{かた}い表情^{へいじよう}でこちらを覗^{のぞ}いている。近

くの壁画を見れば、やまいぬ 豺わに や鱈あおさぎ や青鷺などの奇怪きかいな動物の頭をつけた神々の憂鬱ゆううつな行列である。顔も胴どうもない巨おおきな眼ウチヤトが一つ、細長い足と手とを生はやして、その行列に加わっている。

パリスカスはほとんど無意識に足を運ばせて奥へ進んだ。五六歩行くと、彼は躓つまずいた。見ると、足許あしもとに木乃伊がころがっている。彼は、またほとんど何の考えもなしにその木乃伊を抱起だきおこして、神像の台たてに立掛けた。數日來見飽みあきるほど見て来た平凡へいほんな木乃伊である。彼は、そのまま、行過ぎようとして、ふとその木乃伊の顔を見た。

途端とたんに、冷熟いずれともつかぬものが、彼の脊筋せすじを走つた。木乃伊の顔に注いだ視線を、もはや外そらすことが出来なくなつた。彼は、磁石じしやくに吸寄せられたように、凝乎じつと身動きもせず、その顔に見入つた。

どれほどの長い間、彼はそこに、そうしていたろう。

その間に、彼の中に非常な変化が起つたような気がした。彼の身体からだを作上げている、あらゆる元素どもが、彼の皮膚ひふの下で、物凄ものすごく（ちようど、後世の化学者が、試験管の中で試みる実験のように）泡立あわだち、煮にえかえり、その沸騰ふつとうがしばらくして静まつた後は、すっかり以前もとの

性質と変ってしまったように思われた。

彼は大変やすらかな気持になった。気がつくくと、埃及入国以来、気になって仕方なかったこと——朝になって思出そうとする昨夜の夢のように、解りわかそうできて、どうしても思出せなかったことが、今は実に、はつきり判るのである。なんだ。こんな事だったのか。彼は思わず声に出して言った。「俺おれは、もと、この木乃伊だったんだよ。たしかに。」

パリスカスがこの言葉を口にした時、木乃伊が、心持、唇くちびるの隅すみをゆがめたように思われた。どこから光が落ち

て来るのか、木乃伊の顔の所だけ仄明るく浮上っていて、はつきり見えるのである。

今や、闇を劈く電光の一閃の中に、遠い過去の世の記憶が、一どきに蘇って来た。彼の魂がかつて、この木乃伊に宿っていた時の様々な記憶が。砂地の灼けつくような陽の直射や、木蔭の微風のそよぎや、氾濫のあとの泥のにおいや、繁華な大通を行交う白衣の人々の姿や、沐浴のあとの香油の匂や、薄暗い神殿の奥に跪いた時の冷やかな石の感触や、そうした生々しい感覚の記憶の群が忘却の淵から一時に蘇って、殺到して来

た。

その頃、彼はプタープターの神殿の祭司でもあったのだらうか。だらうか、と云いうのは、彼のかつて見、触ふれ、経験した事物が今彼の眼前に蘇よみがえって来るだけで、その頃の彼自身の姿は一向に浮うかんでこないからである。

ふと、自分が神前に捧ささげた犠ぎ牲せいの牡牛おうしの、もの悲しい眼が、浮かんで来た。誰か、自分のよく知っている人間の眼に似ているなと思う。そうだ。確かに、あの女だ。たちまち、一人の女の眼が、孔く雀じやく石いしの粉を薄くつけた顔が、ほっそりした身体つきが、彼に馴な染じみのいぐさと共

に懐なつかかしい体臭たいしゆうまで伴ともなって眼前がんぜんに現れて来た。ああ懐なつかかしい、と思う。それにしても夕暮ゆうぐれの湖の紅鶴べにづるのような、何と寂さびしい女だろう。それは疑うたがもなく、彼の妻だった女である。

不思議なことに、名前は、何一つ、人の名も所の名も物の名も、全然憶おもい出だせない。名の無い形と色と匂と動作とが、距離きよりや時間の観念の奇妙きせうに倒錯とうさくした異常な静けさの中で、彼の前にたちまち現れ、たちまち消えて行く。彼はもはや木乃伊を見ない。魂が彼の身体を抜出ぬけだして、木乃伊に入ってしまったのであろうか。

また、一つの情景が現れる。自分は酷い熱で床の上に寝
ているらしい。傍には妻の心配そうな顔が覗いている。
その後には、まだ誰やら老人らしいのや子供らしいの
が居る様子である。ひどく咽喉が渴く。手を動かすと、
すぐに妻が来て、水を飲ませてくれる。それからしばらく、
うとうとする。眼が覚めた時は、もうすっかり熱が
ひいている。うす眼をあけて見ると、傍で妻が泣いてい
る。後で老人達も泣いているようだ。急に、雨雲の陰
が湖の上をみるみる暗く染めて行くように、蒼い大きな
翳が自分の上にかぶさって来る。目の眩むような下降感

に思わず眼を閉じる。

そこで彼の過去の世の記憶はぶつつり切れている。さて、それから幾百年間の意識の闇が続いたものか、再び気が付いた時は、（すなわち、それは今のことだが）一人の波斯ペルシヤの軍人として、（波斯人としての生活を数十年送った後）己おのれのかつての身体の木乃伊の前に立っていたのである。

奇怪な神祕の顕現けんげんに慄然りっぜんとしながら、今、彼の魂は、北国の冬の湖の氷のように極度に澄明ちようめいに、極度に張りつめている。それはなおも、埋没まいぼつした前世の記憶の底を

凝視ぎょうしし続ける。そこには、深海の闇に自ら光を放つ盲魚共のように、彼の過去の世の経験の数々が音もなく眠ねむっているのである。

その時、闇の底から、彼の魂の眼は、一つの奇怪な前世の己の姿を見付け出した。

前世の自分が、ある薄暗い小室の中で、一つの木乃伊と向い合って立っている。おののきつつ、前世の自分は、その木乃伊が前々世の己の身体であることを確認せねばならない。今と同じような薄暗さ、うすら冷たさ、埃っぽいにおいの中で、前世の己は、忽然こっぜんと、前々世の己の

生活を思出す……

彼はぞつとした。一体どうしたことだ。この恐ろしい一致は。怯れずになお仔細に観るならば、前世に喚起した、その前々世の記憶の中に、恐らくは、前々々世の己の同じ姿を見るのではなからうか。合せ鏡のように、無限に内に畳まれて行く不気味な記憶の連続が、無限に――目くるめくばかり無限に続いているのではないか？

パリスカスは、全身の膚に粟を生じて、逃そうとする。しかし、彼の足は、すくんでしまう。彼は、まだ木

乃伊の顔から眼を離す^{はな}ことが出来ない。凍^{こお}ったような姿勢で、琥珀色^{こはくいろ}の干涸^{ひか}らびた身体に向いあつて立っている。

翌日、他の部隊の波斯兵がパリスカスを発見した時、彼は固く木乃伊を抱^{いだ}いたまま、古墳^{こふん}の地下室に倒^{たお}れていた。介抱^{かいほう}されてようやくやく息をふき返しはしたが、もはや、明らかな狂気の徴候^{ちようこう}を見せて、あらぬ謔言^{うわごと}をしやべり出した。その言葉も、波斯語ではなくて、みんな埃及語だったということである。

(昭和十七年七月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館